

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 早川さんの多彩な活躍ぶりがうかがえる一枚。とある映像イベントで九州大学の博士課程の学生とコラボレーション。本番前にサウンドや映像を厳しくチェック。これから観客にどんな映像メッセージを送るのか。

2 2008年9月4日～10月22日にタイ・バンコクで早川貴泰個展「Asian Animism and Animation」が開催された。そこで展示発表された作品「えん」(デジタルタブロー)の中のワンシーン。

3 タイの高校生たちと一緒にニコロリの早川さん(最後列中央)。タイ・バンコクでの個展開催期間中にリゾート地プーケットの高校を訪ね、「早川貴泰Animation Workshop in Phuket」を開催。交流を楽しんだ。

「今までに無い新しいアニメーションを創る」を核に制作から教育まで、多方向へと展開したい。

早川貴泰 アニメーション作家・映像作家

中学時代から「将来はアニメーションを創る人になる」としっかりとしたビジョンを持っていたという早川さん。現在は、地元である山形を遠く離れた九州の地を拠点に、アニメーション作家・映像作家として活躍している。その夢への第一歩として、早川さんはアートの基礎と一般教養を学ぼうと教育学部の美術科を志望した。卒業後も初心はまったくブレることなく、本格的にアニメや映像を学ぼうと専修学校、さらには大学院へと進学。その一途な思いが現在のアニメーション作家・映像作家としての実績や数々の受賞歴に結びついていったに違いない。さらに、作家活動の傍ら大学の研究員や非常勤講師として教育にも携わっており、実に多彩な肩書きを持つOBで

ある。そんな早川さんにとって、山形大学で過ごした4年間とは。「現在の自分自身のあらゆる基礎は山大で学んだと思っています」と当時を振り返る。作品の構成やコンセプト、モチーフなど美術科で学んだ専門分野はもちろんのこと、教員養成課程のカリキュラムで学んだことが、学生に映像の講義をしたり海外の子どもたちを相手にワークショップを行ったりしている今の早川さんのベースになっているというのだ。そして、今現在何よりも感謝しているのは、「山形大学に何も無かった」こと。これは皮肉でも後悔でもなく、後になって気がついた素直な気持ちである。それは、早川さんが映像専門の設備も先生もいない山大で、卒業制作としてアニメーション作品を

創ろうとしたことにはじまる。まず、バイトをしてMacを買うことからすべて自分でなんとかするしかない状況。これは何ものにも代えがたい良い経験になったし、親身になって相談にのってくれた先生や先輩、同級生がいることのありがたみを感じることができた。手探りでやっていたあの頃があるからこそ、それを洗練させた結果が今につながっている。2004年にはアジア・デジタル・アート・アワードにおいて日本人初の大賞を受賞するなど、活躍著しい先輩から後輩のみなさんへ、メッセージ代わりに届いたのは、早川さんの好きな本「今日の芸術」(岡本太郎・著)を勧める声。先輩を訪ねるような気持ちでページをめくってみてはどうだろうか。

継続の成果